

## 2020 年度 入学試験問題

# 国 語

## (第 1 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ことばの意味を学ぶということは、一つひとつの単語が指す対象の一つを知るだけでは不十分である。ある単語をきちんと使うためには、その単語が指し示す意味の範囲はんいを知らなければならぬからである。しかし、単語の意味の指し示す範囲は、一つの単語それ自体では決まらず、それぞれの単語の <sup>a</sup> キョウカイはその領域に属する他の単語との関係によって決まる。

例えば「アオ」という色の名前の範囲は、「アオ」と隣り合う色である「ムラサキ」や「ミズイロ」「ミドリ」とのキョウカイで決まる。日本語の「着る」という動詞の意味を理解し、<sup>b</sup> カンシュウに則して使うためには、「着る」「履く」「かぶる」「つける」などの違いがわからなければならぬはずである。

つまり、<sup>※</sup>語彙は膨大な数の単語からなるシステムなのである。システムとしての語彙を身につけるためには、単語単体の意味を学ぶだけでは **A** 十分である。単語同士の関係を学び、システムをつくっていく必要がある。その中で、似ている単語同士がどう違っていて、その二つの単語のキョウカイがどこに引けるかを知ることがはとくに大事である。子どもはどのように単語同士の関係を学び、システムを構築しているのだろうか。

大人でも日常生活で自分の知らない新しい語に触れる機会がしばしばある。例えば、目の前にネコがいるときに、あなたの友人が「あ、カヒグがいるよ」と言ったとしよう。あなたは <sup>①</sup> いぶかしく思い、「目の前にいるのは自分の知る限り、どう見てもネコだ。なのに、なぜ友人は「カヒグ」なんて呼ぶのだろうか？」と考えるだろう。そして「このネコは飼い主に「カヒグ」という名前を付けられたネコなのだろうか？」とか、「ネコの中でも「カヒグ」という種のネコなのだろうか？」、あるいは「まさか自分の知らない新種の動物なのだろうか？」などのように考えるのではないか。

つまり、あなたは自分が知っている「ネコ」という概念がいねんと対比しながら、新しい「カヒグ」という語の意味を考えるだろう。これは大人が、ことばについての大事な性質、つまり、**B** ということを知っているからだ。

ことば同士の関係にはどのようなものがあるか？ まず「対比の関係」がある。「ネコ」と「ウサギ」、あるいは「リンゴ」と「バナナ」は、互に対比的な関係にある。「ネコ」のカテゴリに入るモノは「ウサギ」ではないし、「リンゴ」と呼ばれるモノは「バナナ」ではありえない。

それに対して「動物」や「ペット」は、「ネコ」も「ウサギ」も「イヌ」も含む、より <sup>※</sup>包括的なカテゴリである。それに対して **C** はそれぞれ「ネコ」「イヌ」のカテゴリに含まれる特定の種類のネコ、イヌを指す。

子どもが今まで聞いたことがない、新しいことばを聞いたとき、そのことばと結び付けられる

対象はいつも、いままでに見たことがない、ミチのモノだとは限らない。「バナナ」を指しているのに「果物」と言われることもある。目の前にあるのは「リンゴ」なのに「フジ」ということばを聞くこともある。つまり、子どもは「バナナ」と「果物」がどのような関係なのか、「リンゴ」と「フジ」がどのような関係にあるのかも見極めなければならないのである。

子どもはここでもあれこれ迷わない。二歳くらいになると子どもは、さきほど述べたように、二つの違うことばがまったく同じ意味を持つことはないという、語彙の一般的な性質に気づくようになる。これも語彙についてのスキーマである。\*

知らないモノに対して知らない単語を聞くと、子どもたちはそれを普通名詞だと考えて、それと形が似た他のモノに対してもそのことばを使う。しかし、例えば「ペンギン」のように、すでに知っている動物をターゲットにして、「これはヘクというのよ」と知らない名前を教えられると、子どもは「ヘク」とはターゲットの「ペンギン」に与えられた特定の名前、すなわち固有名詞だと考える。つまり、二歳くらいの子どもは、「ヘク」は「ペンギン」とは違う意味のことばだと考えるのである。

それだけでなく子どもは、動物は固有の名前を持つが、人工物は固有の名前を持たないと知っている。ターゲットを、すでに名前を知っている人工物、例えば「コップ」に替えて、「これはヘクというのよ」と教えてみる。すると今度は、「ヘク」を固有名詞だとは考えずに、「紙コップ」のように、一般的な「コップ」よりも狭い範囲の意味のことばとして「ヘク」を解釈する。二歳くらいになるとすでに子どもは、「ペンギン」や「ネコ」のような動物には「ポチ」や「タロー」のような固有名詞の名前がつくことを知っている一方で、「コップ」や「ボール」のような人工物には「ポチ」や「タロー」といった固有名詞はつかないと知っていて、<sup>②</sup>その知識をはじめて聞く単語の意味を推測する時に使うのである。

子どもの推論した意味がいつも正しいとは限らない。例えば、「クジラ」ということばを知っていて「イルカ」ということばを知らない子どもがいるとする。この子どもがイルカを「クジラ」と呼ぶことは十分考えられる。実際、そのような例はマイキョにいとまがない。例えば、一歳台の子どもが、ことばを話しはじめたとき、イヌを「ワンワン」と呼ぶだけではなく、ネコもウシもライオンも「ワンワン」と呼ぶことは頻繁に見られる。

名前を知っている(と子どもが思っている)モノに新しい名前をつけたとき、その名前がもともとの名前のモノの特定の種類を指す場合もあれば(チワワでもあり、イヌでもある)、それと対比の関係にある(イルカであり、クジラではない)場合もある。

子どもはこの二つの場合を区別して、新しいことばとすでに知っていることばとの関係を考えるなければならない。そして、実際、子どもは新しいことばを聞くと、そのことばの意味を考えるだけでなく、そのことばと関係する、すでに知っていることばの意味もいっしょに考える。また、必要があれば、すでに「知っていた」ことばの意味を修正し、アップデートもする。<sup>③</sup>それが次のような実験でわかった。さきほど述べた「コップ」の例と同じように、今度は「ボール」とい

うことばを知っている子どもに対して、「これはヘクというのよ」と教えてみたのである。

この実験に参加してくれた子どもたちは二つのグループに分けられた。グループ1の子どもたちには、<sup>※</sup>さきほど紹介した「ネケ」の実験と同じように、よくある球形のボールを指差して、「これはヘクというのよ」と教えた(問7(1))。一方、グループ2の子どもたちには、あまりボールらしくない形をしたモノ(卵型のボール)を指差して、「これはヘクというのよ」と教えた(問7(2)・(3))。どちらのグループの子どもも、「これはヘクというのよ」と新しいことばを聞く前には、ターゲットのことを「ボール」と呼んでいた。

このとき用意したモノは、①「ヘク」と教えられたターゲットと形も模様もそっくりのモノ、②名前をつけられていない球形のモノ(典型的なボールの形をしたモノ)、③ボールとは呼べないモノ(靴)である。そして、ターゲットを指差して「これはヘクというのよ」と知らないことばを教えた後に、「じゃあ、ヘクはどれ？」と子どもにも尋ねた。同時に、「ヘク」ということばが①から③のどのモノを指すかも聞いてみた。

すると、二つのグループの子どもたちは異なる反応を示した。グループ1の子どもたちは、「ヘク」ということばを「ボール」の一種として解釈した。つまり、「ヘク」ということばは、ターゲットと似た形の①のモノに対してだけでなく、②のモノに対しても使えると考えた。一方、グループ2の子どもたちは、同じ卵の形をした①のモノを「ヘク」と呼んだが、②のモノは「ヘク」とは呼ばなかった。しかもそれだけでなく、ターゲットである卵型のボールに対して「ボール」と呼ぶのをやめてしまったのである。

グループ2の子どもたちは「ヘク」ということばを教わるまでは、ターゲットである卵型のボールを確かに「ボール」と呼んでいた。ところが、新しい「ヘク」ということばを知った後は、「それはヘクだからボールではない」と解釈をするようになったのである。つまり、モノの名前は形が似たものにつくという「思い込み」から、卵型のボールを「ボール」と呼ぶのに何となく収まり悪く感じていたところに、「ヘク」という新しいことばを教えられたことで、すでに知っていた「ボール」ということばの範囲を修正したのだ。

子どもは、新しいことばを覚えると、そのことばをさらに新しいことばの意味を推測するために使う。また、すでに知っていたことばの意味の修正にも使う。子どもは一つひとつの単語の意味を考えると、単語はいつも他の単語と関係づけられるものだと意識している。言い換えれば、子どもは小さい時からすでに、単語は語彙というシステムの中の要素であることを理解している。その上で、新しい単語を聞くたびに、そのシステムの中で整合性がとれるように単語の意味を理解しようとしているのだ。

子どもが母語をすぐに使えるようになるのは、言語に関するどのような知識であれ、その知識がシステムであることを想定し、その<sup>※</sup>端緒を自分で見つけ、知識の増やし方を見つけないながら、統合されたシステムをつくり上げていくからなのである。

〈今井むつみ『学びとは何か―探求人―になるために』より〉

※語彙……ことば・語句・文章などのこと。

※包括的……全体をおおっていること。

※さきほど述べたように……筆者は二歳の子どもに対して、「ことばについてどのように認識して  
いるのか」を確かめる実験をしている。

※スキーマ……知識の枠組みのこと。

※さきほど紹介した「ネケ」の実験と同じように……筆者は幼児に対して、ぬいぐるみを指さし

「これはネケよ」と教え、その後どのような反応を示すのかを確かめる実験をしている。

※端緒……ものごとの手がかり。

問1 —— 線 a～d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん A に入る漢字と組み合わせる意味が通ることばを次からすべて選び、番号で答

えなさい。

- 1 常識
- 2 必要
- 3 日常
- 4 習得
- 5 安定
- 6 完成

問3 —— 線①「いぶかしく」の意味として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答

えなさい。

- 1 はつきりとわからなくて気にかかる。
- 2 さっぱりわからなくて残念に思う。
- 3 怪しいあやな思っている。
- 4 いらいらしながらも理解しようとする。

問4 空らん B に入る語句として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 一つの単語は別の単語と区別される意味を持つ
- 2 一つの単語は別の単語に統合されて意味を持つ
- 3 それぞれの単語は必ず対比関係の意味を持つ
- 4 それぞれの単語が特定の単語と対応する意味を持つ

問5 空らん C に入る語句として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「タロー」や「ポチ」
- 2 「アメリカンショートヘア」や「チワワ」
- 3 「トマト」や「ポテト」
- 4 「ほ乳類」や「肉食動物」

問6 ——線②「その知識」とはどのような知識ですか。本文中の語句を用いて三十字程度で答えなさい。

問7 ——線③「それが次のような実験でわかった」とありますが、本文をよく読んで次の問いに答えなさい。

(1) 実験後、グループ1の子どもたちが「ヘク」と呼ぶものをすべて選び、丸で囲みなさい。解答は解答らん(1)の図に直接書き込むこと。

(2) 実験後、グループ2の子どもたちが「ヘク」と呼ぶものをすべて選び、丸で囲みなさい。解答は解答らん(2)の図に直接書き込むこと。

(3) 実験後、グループ2の子どもたちが「ボール」と呼ぶものをすべて選び、丸で囲みなさい。解答は解答らん(3)の図に直接書き込むこと。

問8 この文章の表現と構成について、次の問いに答えなさい。

(1) この文章の表現に関する説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 筆者は「それは、ヘ、ク、だ、か、ら、ボ、ール、で、は、な、い、」という箇所かしよにだけ、傍、点、を、付、け、る、こ、と、で重要などころを強調している。

2 強調したい箇所や話し言葉や固有名詞などに「」（カギカッコ）を用いることによって、特別な意味を持たせている。

3 「つまり」や「そして」といった接続詞を適度に用いており、文章全体を通して読者を論理的な読み方に導いている。

4 「ワンワン」や「ポチ」などといった幼い子どもでも聞いたことのある固有名詞を使うことによって文章に親しみを持たせている。

(2) この文章の構成に関する説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 まず、子どもがどのようにして語彙という複雑なシステムを構築するのか、はっきりとした結論を記している。そして、大人と子どもの違いや、実験によってわかったことなど、すでに示されている結論の根拠こんきょを段落ごとに述べていくという構成になっている。

2 まず、大人と子どもで語彙というシステムが異なることを明らかにしている。そして、子どもが幼少期からどのように語彙を増やしていくのかを具体的に示し、「ヘク」という言葉についての実験がどのような結果をもたらしたのかまとめるという構成になっている。

3 まず、語彙がシステムであると明言し、子どもがどのようにそのシステムを構築するのかと読者に疑問を投げかける。そして、子どもが語彙を習得する過程を実験などの具体例を用いながら順序立てて説明することによって、結論を導き出すという構成になっている。

4 まず、言葉覚えるシステムについて問題提起し、子どもがどのように成長するのかを読者に考えさせようとする。そして、子どもが語彙を増やすためにどのような認識をしているのか、実験とその結果を中心に示すことによって結論を導き出すという構成になっている。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」(高橋さおり)は演劇部の部長をしている。演劇部は大会でもあまり目立たなかったが、ある日、学生時代に役者を志していた吉岡先生が赴任してくる。吉岡先生の指導もあり、部は県大会への出場を決めたが、県大会直前に吉岡先生はもう一度役者を目指すため、学校を辞めてしまう。以下はそのような状況下での県大会本番の一場面である。

教室の場面が終わって、袖に入ってきた中西さんが、私の耳元で囁いた。

「吉岡先生が来てる」

私は「え」と声に出しそうになって、それをこらえた。

① 「みんなには言わない方がいいね」

「うん」

普段の舞台なら、前から強い照明があたると客席はほとんど見えなくなる。ただ、今回は、プロジェクターの効果を生かすために、劇場の人のアドバイスもあって、上からあてるサスというライトを多用している。地区大会の時には、いつもよりお客さんの顔が見えて、それも動揺した理由かもしれないと明美ちゃんが言っていた。

でも、本当に、お客さんの顔なんて分かるんだろうか。分かるか、吉岡先生なら。そして中西さんなら。

② 「勝とう」

私は中西さんの耳元に囁いた。

「もちろん」

中西さんはそう言って、自分の出番の位置に走っていった。

中西さんは、少し前屈みになって、自分の出番のタイミングを窺っている。獲物を狙う豹のように鋭く、公園で遊んでいる我が子を見つめる母親のように優しく。

私は、次の出番に向けて舞台袖に立つ俳優の姿が好きだ。その立ち姿を見るのが好きだ。たぶん、こんなに真剣で純粹な眼差しを、普段の人生で、私たちは、あまり目にすることができないから。

一生懸命、いろいろなことを勉強をして、もしも私が何かこういう舞台関係の仕事に就くことができたなら、私はこの美しい風景を、毎日のように見られるようになる。普通の人が一瞬見ることのできないこの風景を、いつも見ることができるようになる。

舞台上は、ジョバンニが走り出している。丘を越え、丘を下り、町の中を駆け抜ける。いつもより少し、ユッコの走る速度が速い気がする。でも台詞は早口にはなっていない。周りの早替えが間に合うだろうか。



演技はみんな、ユッコのペースについていっている。  
やがて、ジヨバンニが疲れ果てて眠りにつく。舞台に静寂が戻る。

車掌 銀河ステーション、銀河ステーション、

ジヨバンニ え？

車掌 お乗り遅れないようにお願いします。

ジヨバンニ 銀河ステーション？

車掌 お乗り遅れないように、お急ぎください！ 銀河ステーション、銀河ステーション、

ジヨバンニとカンパネルラの旅が始まる。

考古学者、鳥捕り、灯台守、検札に来る車掌。二人は次々と、おかしな人びとに出会っていく。  
俳優の早替えを手伝うのが一段落して、私にも、舞台を見る余裕が少しできる。

検札に来た車掌が上手に退場。

カンパネルラと灯台守は、ジヨバンニの持っている切符をのぞき込む。

ジヨバンニ 僕には、ただのポケットの紙切れにしか見えないけど、

カンパネルラ うん。

灯台守 いやいや、これは、たまげた切符ですよ。

ジヨバンニ え？

灯台守 これは、本当の天上どころか、aです。

ジヨバンニ 本当に？

灯台守 話に聞いたことはあったけど、実際に見るのは私も初めてです。

ジヨバンニ はあ、

灯台守 いや、あなたたちは、大したもんだ。

ジヨバンニ ……………

カンパネルラ ……………

灯台守 いったい、あなたたちは、どこまで行くんでしょうね。

「あ」と、今度は本当に声を上げてしまった。客席はもちろん、舞台にも聞こえなかっただろうけど、近くにいた舞台担当の先生は、何かあったのかと心配してくれた。

「すみません。なんでもありません」

と小声で答える。

「あ」と声を出したのは、大切なことに気がついたからだ。

自分で構成し、自分で大部分の台詞を書いて、そして自分で演出をしてきた舞台なのに、いま、

③ 私は、この作品が何を描こうとしていたのかが、やっと分かった。いや、頭でぼんやり分かってはいたつもりだったことが、はっきりとした形、はっきりとした音、はっきりとした色、はっきりとした言葉になって、私の中に押し寄せてきた。

ジョバンニは、たくさんの人と出会って成長をしていく。『みんな卒業をうたおう』の主人公が、先輩を一生懸命好きになることで、他の友だちや学校を好きな気持ちの心に広がっていったように。

「大人になるということは、人生のさまざまな不条理を、どうにかして受け入れる覚悟をすることです」

何の授業だったか、ずっと前に滝田先生から習ったような気がする。

ジョバンニは、親友カンパネルラの死を受け入れていく。いや、本当は、夢の中で最初にカンパネルラに出会ったときに、その髪の毛が濡れていたときに、もうジョバンニは、カンパネルラがこの世にいないことは分かっていたんだ。でも、親友を失う辛さ、その理不尽さに耐えるためには、宇宙を一周巡るほどの旅が必要だった。

お母さんは、いつたいどこまでのことが分かっている、あの漫画を私にくれたんだろう。

中学二年生くらいから高校一年生くらいまで、だからえっと、十三歳から十五歳くらいまで、たしかに私は、何かに苛立っていた。それはみんな、そういうものなのだろうけど、でも、いままらその苛立ちの所在が分かる。

私は、何ものにもなれない自分に苛立っていた。

本当は何かを表現したいのに、その表現の方法が見つからない自分を持って余していた。

もう少し勉強すれば、地域で一番の進学校にも行けたのに、通学の長さを理由に、行きやすいいまの学校を選んだ自分が嫌いだった。

演劇は、そんな私が、やっと見つけた宝物だった。

でも、その宝物を大事にしない演劇部の先輩たちに苛立っていた。

いや、その苛立ちが、自分の身体のどこに巣くっているのかさえ気がつけないう自分のことを嫌っていた。

それでも私は、吉岡先生に出会い、中西さんに出会い、ううん、もつとその前から、ユッコやガルルや、そしてわび助に出会っていた。溝口先生も滝田先生も、お母さんやお父さんやおばあちゃんも、それからこの一年の間に観たたくさんのお芝居や詩や本たちも。

気がつくとき、舞台は、私が大きく書き換えた二つ目の場面を迎えていた。

灯台守も消えて、ふたたび、ジョバンニとカンパネルラは二人きりになる。

カンパネルラ　ねえ、ジョバンニ、宇宙はどんどん膨らんでいるって知ってた？

ジョバンニ　なに？

カンパネルラ　宇宙はどんどん、生まれたときから、どんどん膨らんでるんだ。

ジヨバンニ どういうこと？

カンパネルラ だから、僕たちはどこにも行けない。どこまででも行ける切符を持っていても、宇宙の端にはたどり着けない。

ジヨバンニ カンパネルラ、

カンパネルラ 僕たちはいつも一緒だけど、でも僕たちは離ればなれた。

ジヨバンニ どうして？

カンパネルラ 宇宙が膨らんでいくように、僕たちの間も広がっているんだ。

ジヨバンニ そんなことないよ、だって、

カンパネルラ 本当だよ、

ジヨバンニ そんなことない、だって、ほら、(ジヨバンニ、カンパネルラの手を握る)

ほら、僕たちは、こうやってつながっている。

カンパネルラ ……うん……うん、そうだった。

ジヨバンニ 僕たちは、いつもつながっている。

「早く終わって」と思った地区大会の時と違って、ああ、もうこの時間が、ずっと続けばいいのにと私は思った。

この舞台には「等身大の高校生」<sup>④</sup>は一人も登場しない。たぶん、そんな人は、どこにもいないから。現実の世界にも、きつと、いや絶対、いないから。

進路の悩みや、家族のこと、いじめの話も一つも出てこない。

こっちはもちろん、現実世界にはあることだけど、やっぱり私たちの、少なくとも、いまの私の現実ではない。

私にとっては、この一年、演劇をやってきて、とにかくいい芝居を創るために悩んだり、苦しんだり、友だちと泣いたり笑ったり喜んだりしたことが、よっぽど、よっぽど現実だ。この舞台の方が現実だ。

そうだ！ 思い出した。高校二年生の時の滝田先生の現代文は、夏目漱石の『三四郎』を一期かけて読むという授業だった。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より…、日本より頭の中の方が広いでしょう」

私たちは、舞台の上でなら、どこまででも行ける。どこまででも行ける切符をもっている。私たちの頭の中は、銀河と同じ大きさだ。

でも、私たちは、それでもやっぱり、宇宙の端にはたどり着けない。私たちは、どこまで、どこまでも行けるけど、宇宙の端にはたどり着けない。

どこまででも行けるから、だから私たちは不安なんだ。その不安だけが現実だ。誰か、他人が作ったちっぽけな「現実」なんて、私たちの現実じゃない。

⑤ 私たちの創った、この舞台こそが、高校生の現実だ。

やがて、出演者全員が死者となつて舞台上に登場し、カンパネルラは、その渦の中に巻き込まれる。サザンクロスで、二人は離ればなれになる。

再び、眠りにつくジョバンニ。

ジョバンニは、どこまで覚悟をしたのか。

私は、どこまでの覚悟をしたのか。

たぶん私は、私たちを裏切った吉岡先生を許さない。もつと大人になつても、それで、この三週間の出来事を受け入れられるようになるとも思わない。でも、それでも私は、私たちのもとを去っていった吉岡先生を恨まない、憎まない。

ジョバンニだつて、カンパネルラの死をすべて受け入れたわけじゃない。でもジョバンニは、カンパネルラのお父さんの、別れ際の最後の言葉を忘れないだろう。大人になるといふことの辛さを、いまのジョバンニならきつと理解できるから。

父 ……ジョバンニ君、今夜は、本当にありがとう。

ジョバンニ えっと、僕、

⑥ 父 明日か明後日、みんなでうちに遊びに来てください。

ジョバンニ ……はい。

父 ありがとう。

※父親、下手に退場。

袖にはけてきた父親役のわび助が、私のそばにやってくる。ゆつくりとハンチング帽を脱いで、私の斜め後ろに立つ。

私とわび助は、並んで、舞台上のジョバンニを見つめる。

ジョバンニが、ユッコが、ゆつくりとキューブの上に立った。

ここが、最後に私が増やした台詞だ。

ジョバンニ カンパネルラ、僕は今日の学校での最後の時間、本当は眠っていませんでした。

いや、眠っていたのだけど、君の声に起こされた。

君は僕をかばってくれたけど、でも君は、君と僕は一つではないと言った。僕は、とても悲しかった。悲しかったけど、本当にそうだと思った。

どこまでも、どこまでも一緒に行きたかった。でも、一緒に行けないことは、僕も知っていたよ。

カンパネルラ、僕には、まだ、本当の幸せが何か分からない。  
宇宙はどんどん広がっていく。だから、人間はいつも **b** だ。  
つながっていても、いつも **b** だ。  
人間は、生まれたときから、いつも **b** だ。  
でも、**b** でも、宇宙から見れば、みんな一緒だ。  
みんな一緒でも……みんな **b** だ。

遠くの高く積み重ねたキューブの上に、カンパネルラが立って手を振っている。

ジヨバンニ カンパネルラ！

カンパネルラ …………… (クルミを叩く)

ジヨバンニ クルミだ！ (ジヨバンニも、ポケットの中からクルミをさがし出す) このクルミは、たしかに僕の手の中にある。カンパネルラ、僕も、ずっと持つてるからね。

※カンパネルラ、手を振る。

ジヨバンニ カンパネルラ！

また、いつか、どこかで！

大きく手を振る二人。

照明が消え、二人は、プロジェクターから映し出される銀河の中に吸い込まれていく。

私はゆつくりと、緞帳を下げるボタンを押す。

⑦ 上がっていくときは、あんなにもするすると上がっていったはずの緞帳が、いまは終演を惜しむかのようにゆつくりと下りてくる。

手を振り続ける二人。

幕が下りた瞬間、いままで自分が聞いたこともないような拍手の音がした。厚みのある、そして柔らかな音だった。

反対側の上手の袖で、ガルルが拳を突き上げているのが見える。

中西さんが、積み重ねたキューブを駆け下り、ユッコと握手をした。そして二人が抱き合う。

拍手が止まない。

……………

拍手が止まない。

……………

拍手が、前より大きくなっていく。

横を見ると、わび助が大粒の涙を流していた。私は、拍手の鳴り止まない中、ヘッドホンを外し、

「舞台、撤収」

と言って、袖を飛び出した。

(平田オリザ『幕が上がる』より)

問1 「ジョバンニ」と「カンパネルラ」はそれぞれ誰が演じていますか。最もふさわしいものを次からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「私」
- 2 中西さん
- 3 わび助
- 4 ガルル
- 5 ユッコ

問2 ——線①「みんなには言わない方がいいね」とありますが、中西さんはなぜそのようなことを言ったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 本番中で演技に集中している役者たちを動揺させたくないため。
- 2 吉岡先生が客席に居ることを誰よりも先に見つけられてうれしかったため。
- 3 演劇部の中で特別な存在である「私」と秘密を作りたかったため。
- 4 本番中に声を発することは周囲の迷惑になると思ったため。

問3 ——線②「勝とう」と言った「私」の気持ちはどのようなものであったと考えられますか。後の展開も参考にして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 県大会を前にして突如として姿を消してしまった吉岡先生を心配しながらも、今こうしてひょっこりと劇場に姿を見せた吉岡先生を許したくないという気持ち。
- 2 県大会を前にして急に裏切ってしまった吉岡先生を憎らしく感じながらも、吉岡先生が作ったこの劇だけはどうしても成功させたいという気持ち。
- 3 県大会を前にして突然学校を去って行ってしまった吉岡先生を恨みながらも、今までの感謝の気持ちをこの劇で見せたいという気持ち。
- 4 県大会を前にして辞めてしまった吉岡先生を許さないと感じながらも、意識をこの舞台の成功へと向けようという気持ち。

問4 空らん a に入る語句として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 広い宇宙を見わたすことができる入場券
- 2 どこでも勝手に歩ける宇宙の自由通行券
- 3 宇宙を膨ふくらますことができる専用優待券
- 4 みんなの所に一瞬で帰れる片道専用切符

問5 ——線③「私は、この作品が何を描こうとしていたのかが、やっと分かった」とありますが、どのようなことが分かったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の考えに対する嫌悪感けんおかんを、演劇などのように表現することで拭ぬぐい去り、自分を正当化させてゆくこと。
- 2 誰しもが味わう思春期の苛立ちいらだちを、目の前にいる友人たちに告白することで解消し、自分を正常に保つこと。
- 3 世の中の様々な不条理を、多くの人との出会いや多くの経験を通して受け入れ、自分を成長させていくこと。
- 4 生きていく上で生じる理不尽りふじんさを、宇宙一周に並ぶくらいの旅をして乗り越え、自分と  
いう存在を認識にんしきすること。

問6 ——線④「『等身大の高校生』」とありますが、この「等身大」と異なる意味のことばを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 典型的
- 2 一般的
- 3 個性的
- 4 標準的

問7 ——線⑤「私たちの創った、この舞台こそが、高校生の現実だ」とありますが、「私」が考える「高校生の現実」はどのようなものですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 正解がないことに対する不安を抱かえながら生きていくという現実。
- 2 未来のことを一生懸命に考えて自分自身を追いかけていくという現実。
- 3 深刻化している社会問題に目を向けてその解決策を模索もさくしていくという現実。
- 4 普通の高校生の身の回りにあるありふれた問題を真剣に考えていくという現実。

問8 — 線⑥「父 明日か明後日、みんなでうちに遊びに来てください。」とありますが、このことを「ジョバンニ」はどのように受け止めましたか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 カンパネルラの死を乗り越えようとしていると受け止めた。
- 2 カンパネルラに死なれた悲しみから抜け出せないでいると受け止めた。
- 3 自分にカンパネルラの代わりになってほしいと思っていると受け止めた。
- 4 カンパネルラの思い出をたくさん語ることを願っていると受け止めた。

問9 空らん b に入る語として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自由
- 2 必死
- 3 勝手
- 4 一人

問10 — 線⑦「上がっていくときは、あんなにもするすると上がっていったはずの緞帳が、いまは終演を惜しむかのようにゆっくりと下りてくる。」とありますが、このように感じている「私」の気持ちを説明したものと最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 舞台上で演技を続けている役者たちをいち早く解放してあげたいと感じている。
- 2 自分たちが苦勞して作った作品が成功したことの余韻よゐんに浸ひたりたいと感じている。
- 3 自分勝手に演劇部から去って行ってしまった吉岡先生を見返せたと感じている。
- 4 舞台上の設備が自分たちの作り上げたものを拒絶きよぜつしているようだと感じている。



(問題は次のページに続く)

3 次の【A】～【F】の作品はすべて「木」が登場します。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

子供たちよ。

これは譲り葉ゆずりの木です。

この譲り葉は

新しい葉が出来るよ

入り代かわってふるい葉が落ちてしまうのです。

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作むぞうさくに落ちる

新しい葉にいのちを譲って――。

子供たちよ

お前たちは何を欲ほしがらないでも

凡すべてのものがお前たちに譲られるのです。

太陽の廻まわるかぎり

譲られるものは絶えません。

輝かがやける大都会たいこかいも

そっくりお前たちが譲り受けるのです。

読みきれないほどの書物も

みんなお前たちの手に受取るのです。

幸福なる子供たちよ

お前たちの手はまだ小さいけれど――。

世のお父さん、お母さんたちは

何一つ持ってゆかない。

みんなお前たちに譲ってゆくために

いのちあるもの、よいもの、美しいものを、

一生懸命いっしょうけんめいに造つくっています。

今、お前たちは気が付かないけれど  
ひとりでにいのちは延びる。

鳥のようにうたい、花のように笑っている間に  
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ。

もう一度譲り葉の木の下に立って

譲り葉を見る時が来るでしょう。

(河井醉茗「ゆずり葉」)

【B】やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

石川啄木

【C】くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

正岡子規

【D】わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも

大伴旅人

【E】斧入れて香におどろくや冬木立

与謝蕪村

【F】くたびれて宿かる頃や藤の花

松尾芭蕉

問1 【A】の詩で、作者が最も伝えたかった「主題」を次のような四字熟語の形で表します。こ

の時、空らんのおと☆には詩の中に使われている漢字を使うものとします。完成した熟語を  
答えなさい。

○
☆
交
☆

問2 【A】の詩について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 親というものは子供たちにすべてのものを譲って去っていくだけの存在だという、人生の寂しさを表現した詩である。
- 2 親から子へとさまざまなものを受けついदैく人間の営みを、譲り葉にたとえてやさしい語り口で表現した詩である。
- 3 親から子へと世の中を受けわたしつづけるしかない人間世界の宿命を、子供たちへ説きふせる形で表現した詩である。
- 4 子供に社会を譲りわたす親を譲り葉になぞらえることで、人も自然の一部にすぎないという真理を表現した詩である。

問3 【A】の詩の第二連と【B】の作品に共通して使われている表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 反復法
- 2 倒置法とうちほう
- 3 直喩法ちよくゆほう
- 4 省略法

問4 【C】の作品には、四か所に「の」が使われています。意味・用法がほかと異なるものを一つ選び、次の——線の番号で答えなさい。

くれなる<sup>1</sup>の<sup>1</sup>二尺伸びたる薔薇<sup>2</sup>の芽<sup>3</sup>の針<sup>3</sup>やはらかに春雨<sup>4</sup>のふる

問5 【D】の作品は、「令和」の出典となった、現存する日本最古の和歌集にのっています。この和歌集の名前を漢字で答えなさい。

問6 【E】と【F】の作品の共通点について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 どちらの作品にも「や」という「まくらことば」が使われており、作者の感動の中心を表すはたらきをしている。
- 2 どちらの作品にも季節をあらわすことばである「季語」が使われており、その季語で「体言止め」になっている。
- 3 どちらの作品にも「擬人法」が使われており、木を人間に見立てることで生き生きとした表現を生み出している。
- 4 どちらの作品にも「比喻表現」が使われており、作者の実際の体験が読者に伝わりやすいように工夫されている。

問7 次の漢字の中で、部首が「木」ではないものを一つ選び、番号で答えなさい。

1 橋                    2 株                    3 相                    4 机

問8 次の①～③は「木」という語が使われたことわざや言いならわしです。空らん  にあてはまることばを考え、それぞれひらがな二字で答えなさい。

①  も木から落ちる

② 枯れ木も  のにぎわい

③  の大木

(問題は前のページで終わり)



